

講演抄録

シンポジウム	2
認定研修会	6

一般研究発表

口演発表 (A, B)・ポスター発表 (P)

第1日目 A会場：A 1~12	7~18
第1日目 B会場：B 1~12	19~29
第2日目 A会場：A 13~28	30~45
第2日目 B会場：B 13~28	46~60
第1日目ポスター発表：P 1~60	61~120
第2日目ポスター発表：P 61~114	121~174

歯科医療社会における Gender-free を目指して

鶴見大学歯学部保存修復学講座

桃井 保子

日本歯科保存学会は本年で創立より56年目を迎える。第134回にあたる本大会において、特に女性歯科医師にスポットライトをあてたシンポジウムを企画された中川寛一大会長にまずは敬意を表したい。保存学会の長い歴史を通じ、女性のみが登壇するような企画は初めてに違いない。

今や、多くの歯科大学や大学歯学部で女子学生の占める割合が増え、女子の歯科医師国家試験合格者数は全体の半数に迫る勢いである。わが国の女性歯科医師の数は2万人に及ぶ。男性諸君は、歯科医療の現場においてこのところ女性の台頭が著しいと感じていることであろう。しかし、実際にそのスピードは、他の先進国と比べようもないほど遅い。日本歯科医師会が行った調査¹⁾では、女性会員は全体の8%と報告されている。また、大学などの研究・教育機関の責任ある地位に、各学会の理事や常任理事に就いている女性の数はとても少ない。2010年に世界経済フォーラム²⁾が発表したわが国の“女性力”ランキングは実に94位、先進国中のワーストである。このように、日本では女性が責任ある仕事に就いている割合が低いといった実態があるが、たとえば、ADA（米国歯科医師会）は2006年に女性のKathleen Roth氏を会長に指名し、IADR（国際歯科研究学会）では、1981年58代会長Marie Nysten氏に続き、76代、77代、84代、そして現86代会長Maria Navarro氏がいずれも女性である。地球上には男女がほぼ半々暮らしている。であるなら、女性の潜在能力を顕在化させ競争力に富んだ社会を作り出すことが得策である。男性の視点でとらえられがちな歯科医療社会は、男女が対等な構成員として教育・研究・診療に参画し、等しく利益を享受し責任を担うことでより豊かになれる。

今回のシンポジウムでは、3名の輝くスペシャリスト、宝田恭子先生、林 美穂先生、天川由美子先生をお迎えする。彼女らは、自らの専門性を活かし、創意と工夫に満ちた歯科医療を日々提供し続ける最前線で輝いている女性たちである。今日の患者中心の医療は、私たちに患者の思いやその揺らぎに寄り添うことを求めているが、本来的にこれは女性の特質と重なる。講演では、診療現場からのメッセージを中心に、結婚・出産・子育て・その後の現場復帰の経験を通して得た彼女たちの人生観も紹介していただく。本シンポジウムを企画された大会長の意図するところが、お集まりのみなさまに届くことを願っている。

文献

- 1) 日本歯科医師会「女性歯科医師の活動に関する検討委員会（倉治ななえ委員長）」報告2010年
- 2) The Global Gender Gap Report 2010: Country Profiles and Highlights-Japan)

患者の求める保存について

宝田歯科医院

宝田 恭子

女性の社会進出が多くなってきた現在、仕事と家庭の両立は、女性にとって最も解決しなければならない課題の一つである。さらに、出産後の育児が加わると「今しかできないこと」「いつでもできること」を考え、時間を有効に使わなければならない。私は多くの患者を断片的に診るのではなく、1人の患者を経年的に診ていくことで、自分に必要な個性が構築されていくと考えている。また人との円滑なコミュニケーションや礼儀など、大人としての当たり前の基礎力に、時代を取り入れた自分らしさを開花させるべく、女性歯科医師として日々の臨床に臨んでいる。私の場合、心身ともに元気になり、笑顔となった患者を送り出したいという気持ちから、従来の歯科診療に加えて口唇や顔面の筋肉エクササイズを積極的に取り入れ、口元の美しさを追求した「アンチエイジング」に力を注いできた。そこで今回私は、女性歯科医師としてどのように歯科治療に携わってきたのか、また口元の美しさに対する顔面のトレーニングの大切さを紹介したい。

若々しさとはどういうことなのか？ 世の男性、女性は、髪型、メイク、皮膚の張り、弾力などが老け顔の一番の要因と考えている。ところがう蝕や歯周病に罹患すると初めて、歯が顔の若々しさを支えていたことに気付くのである。歯科医師として、何よりもまず歯の健康管理を大切にすることが大前提であるが、歯科治療には、口腔内の免疫機能の改善などのトータルなケアが不可欠である。歯や歯肉の健康状態は、年齢や体質よりも各人の意識の持ち方で大きく差が出るものであり、さらに、行き届いたケアにより健康な口腔環境を守ることによって若々しさを保持することにつながる。美しい口元を目指す一番の近道として、鼻唇溝などの解剖学的、経時的な老化の認識、そしてどのような時に刻まれていくのかを、診療中に丁寧に説明することが大切である。自然にシンメトリーがとれた笑顔になるためのエクササイズを患者に伝えることも、歯科をより身近に感じてもらう一つの方法だと考えている。これまでの歯科治療は「噛めない人を噛めるようにする」治療が中心であり、患者への食事指導や顔面トレーニングなど、「噛めるのに噛めていない」患者に対しては注視していなかったように感じる。このように、私たち歯科医師は患者の機能回復を考えての治療や予防を行い、さらに噛めるようになった後のアフターケアも大事な仕事だと考えている。

今回は咀嚼の工夫や適正睡眠をとるための患者への説明や指導方法について紹介し、また魅力的な笑顔をつくる口元のアンチエイジングのためのエクササイズを、一緒に体験したいと思う。

女性歯科医師の可能性を信じて…

歯科・林美穂医院

林 美穂

歯科医師過剰時代の到来とともに、歯科界におけるネガティブな話題は後を絶たない。また近年、歯科大学生の約半数が女性であり、日本の歯科事情は大きく変化しようとしている。

以前より私は“女性は歯科医師にむいている！”と思っていたひとりである。また、“世間がいうほど、これからの歯科は捨てたものではない”とも考えている。その根拠はといわれれば、答えは“一女性開業医としての経験と勘から…”としかいいようがないのであるが、女性であることと女性がもっている感性は歯科医師として有利なことが多いと感じるのである。

また、女性患者さんから「産婦人科と歯科は女医さんが良いです！」という声をよく耳にする。やはり女性心理として男性医師に診られるのは恥ずかしいということなのであろう。私も一女性としてその心理には同意できる。今までは男性歯科医師に比べ圧倒的に数が少ない女性歯科医師は、結婚、出産、育児などで歯科医師としての道を半ば辞めてしまったり、第一線でバリバリと働くスタイルからは遙かかけ離れたところで細々と歯科医師を続けていたのも事実である（そうでない歯科医師ももちろんいるが…）。しかし、女性歯科医師が増加するということは、そのような時代から脱却する時代に突入したといえるのではないだろうか。

一昨年前に私たちはWDC (Women Dentists Club) というスタディ・グループを設立することとなった。若い女性歯科医師育成と育児や子育てでブランクのあった歯科医師が、いつでもカムバックし勉強しやすい環境を提供したいという考えの基、臨床を主体として設立したスタディ・グループである。設立して1年も経たないうちに全国より100名を超える会員が集まり、予想以上に多くの女性歯科医師がこのようなスタディ・グループを待ち望んでいたことに驚きを隠せなかった。今後益々増加する女性歯科医師にとってこのようなスタディ・グループは必要であると確信し、そのような歯科医師の中から将来、歯科界をリードする女性歯科医師も誕生するのではないかと感じている。

そこで、今回は一女性歯科医師としての立場から私の考え方、生き方、診療スタイル、そしてスタディ・グループとの関わりなどをお話しさせていただくと同時に、臨床の奥深さ、楽しさ、そして可能性について臨床ケースを提示しながらお伝えすることができれば幸いである。

審美修復治療の科学と臨床

天川デンタルオフィス外苑前

天川由美子

現在の歯科医療は、緊急処置や疾病に対する医療従事者主体の保険診療がほとんどである。しかしこれからは、健康な状態をより健康に保つための患者主体の自由診療を視野にいれる必要があるだろう。自由診療とは、患者を「説得」するのではなく、「納得」して選択していただく治療である。そして、歯科医師としての診断力や技術力のスキルアップは当然のこと、患者やスタッフとの高いコミュニケーション能力が求められる。治療の方法だけではなく、私たち歯科医師も選ばれる立場なのである。患者との信頼関係の構築も大変重要である。よって歯科医療に対する情熱と高い意識をもち、自身の特徴を活かしたセールスポイントを明確にすることが大切ではないだろうか。

これまで自由診療は、予防・修復・インプラントが柱であった。しかし最近では、マイクロスコープやCAD/CAMなどの応用によりさらに多様化している。その中でも特に、審美修復治療の一般への普及と浸透は目覚ましいものがあり、もはや特別な治療ではないといえる。この背景には、患者の審美的要求が高まったこととともに、接着歯学の進展・審美性や耐久性に優れた材料の開発などがある。

審美修復治療に用いる材料は、コンポジットレジンからセラミックまでさまざまである。最小限の修復処置として頻度の高いコンポジットレジン修復は、現在「小さなう蝕に対する簡単な治療」から「審美修復治療のオプションの一つ」として認められつつあり、また咬合力がかかる部位などにも、適応範囲が拡大している優れた治療法である。しかしながら、このコンポジットレジン修復を、審美修復治療—自由診療として行うためには、歯質削除の基準を明確にして接着に関する正しい知識と、材料や器具を使いこなすトレーニングが必要である。

また、天然歯の色調に問題が認められない場合、審美修復治療の中でもっとも審美的で予知性の高い修復はポーセレンラミネートベニアであろう。これは周知のように、全く保持力のないシェル状のセラミックを歯に接着させる修復法である。そして実際経験してみると、各ステップにおいてもっとも難易度の高い術式の一つともいえる。

すなわち、このような審美修復治療はほとんどが“ボンディッドレストレーション”であり、成功させるためには接着歯学の理解が不可欠なのである。顔貌や歯周組織の診査や調和を綿密に行う必要があるのは、いうまでもない。

今回は、女性歯科医師として私がどのように歯科医療を捉えているか、また一つのセールスポイントとして「接着歯学」を実際の審美修復治療でどのように活かすべきか、臨床症例を紹介しながらお話しさせていただきたいと思う。

歯内療法の悩みと解決への糸口

日本大学松戸歯学部歯内療法学講座

松島 潔

歯内療法（抜髄・感染根管治療）の成功率が成書などには90%以上といわれている中、日々の診療を行われている先生方は再根管治療の多さに疑問をもたれていることでしょう。2010年に厚生労働省から発表された社会医療行為別調査（平成21年6月審査分）を見ると抜髄（単根管、2根管、3根管以上）がそれぞれ203,646件、80,499件、216,242件、感染根管処置（単根管、2根管、3根管以上）がそれぞれ284,582件、84,302件、255,825件と感染根管治療が抜髄に対し約125%になっています。この数字は、いかに根管治療に悩みが多いかを現しているのかもしれませんが。

また、保存学会認定委員会で行った保存関係紹介患者調査では、全国歯学部・歯科大学の病院など25病院歯科施設での総数は、初診患者数277,791、全紹介患者数103,167（37.1%）、保存紹介患者数7,703（対全初診数：2.8%、対全紹介数：7.5%）でありました。これらの患者さんの悩みの解決にあたっているのが、保存治療専門医の皆さんといえるでしょう。

再根管治療の治癒は、初めて行う根管治療の治癒に比較して著しく低くなるといわれます。Sjogren Uらの報告（Factors affecting the long-term results of endodontic treatment；J Endod 16, 498—504）によると、初回の根管治療で根管充填が根尖孔までの距離が2mm以内（2mm以内のunder）での場合の成功率は94%、根尖に5mm以上の透過像を有する根管治療の成功率は76%と報告されています。一方、根管充填された再根管治療では根管充填が根尖孔までの距離が2mm以内（2mm以内のunder）での場合の成功率は67%、根尖に5mm以上の透過像を有する根管治療の成功率は50%であると報告されています。再根管治療になると根尖孔までの距離が2mm以内であっても予後の成功が著しく減少していることに気がきます。

また、通常の歯内療法を行うことで症状の緩和がみられる症例も少なくありません。Abbott PVの報告（Factors associated with continuing pain in endodontics；Aust Dent J 39 (3), 157—161, 1994 Jun.）では根管治療後に疼痛が続いた100例の調査で、ラバーダム防湿の不使用87例、不十分な仮封80例、不適切な根管内貼薬71例、外傷性咬合29例、不適切な根管充填28例などがあげられ、基本的な処置の欠落によって疼痛が引き起こされていることが示唆されています。

今回の研修会では、日本大学松戸歯学部付属病院保存科宛に紹介された患者さんの紹介理由、来院時の症状などから、治療の状況、経過などを調査した結果を前述した報告などと比較しながら、現状の歯内療法の悩みや治療にあたっての気付いた注意点などを考えてみたいと思います。